

国立国語研究所学術情報リポジトリ

＜全文＞日琉諸語の記述・保存研究IV

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2025-07-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0002000527

日琉諸語の記述・保存研究IV

編集

大島 一、セリック・ケナン、五十嵐陽介、山田真寛

2025 年 7 月

国立国語研究所

目次

令和 6 年度 第 2 回「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」合同研究発表会 実施報告	3
---	---

【プロシーディング】秋田県能代山本方言の文法概略 ——調査票を用いた文法調査の経過報告—— 小原 雄次郎	7
--	---

【プロシーディング】沖永良部島「しまむに LINE スタンプ作成会」の実践と成果報告 高 智子・岩崎典子	23
---	----

令和6年度 第2回「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」合同研究発表会 実施報告

プロジェクト名 「消滅危機言語の保存研究」「日本語・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」
リーダー名 山田真寛（研究系・准教授），五十嵐陽介（研究系・教授）
開催期日 2025年3月15日（土） 10：00～16：00
開催場所 国立国語研究所多目的室およびオンライン（Zoom ミーティング）

趣旨

2022～2028年度に行う日琉語諸方言の保存研究と、日琉語諸方言のイントネーション研究プロジェクトの共同研究員による研究発表会です。プロジェクト3年目の第2回目の今回は両プロジェクトの共同研究員による方言データベースや言語復興，ならびに文法や音声などに関する様々な研究発表を行います。

プログラム

10:00～10:40

研究発表「日琉諸語を対象とした方言談話データベース試作版の概要」

高城隆一（九州大学），下地理則（九州大学）

要旨

日琉諸語を対象とした方言談話データベースの試作版について趣旨と概要を説明する。国立国語研究所の「日本語諸方言コーパス」のような大規模コーパスにおいては、大量の談話データが用いられており、直接的な研究利用が可能な設計がなされている。これに対して本データベースでは言語ドキュメンテーションの基本に立ち返り、博物館的な設計を行う。すなわち、グロス（＝形態素情報）や標準語訳・英語訳を丁寧に付けた短い会話や民話を音声付き動画と共に掲載し、各方言のサンプルとして提示する。研究上の興味深い点を強調し、グロスを読み解けるような日英語による文法概説も添えて広く公開することで、海外の研究者の興味を引き付けることができ、方言研究の促進にもつながると考えている。言語ドキュメンテーションにあたっては、文法書・辞書・談話資料の「3点セット」が有機的に結びついている必要がある。このうち辞書については、「日琉諸語オンライン辞書」（カルリノ・サルバトーレ，下地理則）との連携を予定している。文法書の掲載についても計画しており、3点セット公開のためのプラットフォームとして活用されることを想定している。

10:40～11:20

研究発表「秋田県能代山本方言の文法概略」

小原雄次郎（大阪観光大学）

要旨

本発表では、現地調査でのデータに基づき、秋田県能代山本方言の基本的な文法的特徴について報告する。現地での調査にあたっては、国立国語研究所の文法調査票（2017年度～2020年度）を用い、テンス・アスペクト、格、情報構造、文タイプ、待遇等について面接調査を行った。今回の報告では、能代山本方言の概略を示したうえで、特徴的な部分について詳述する。

11:20～12:00

研究発表「沖永良部島「しまむにLINE スタンプ作成会」に関する報告」

高 智子（国際交流基金関西国際センター）、岩崎典子（南山大学）

要旨

親子でしまむにについて対話をしたり交流をしながら、楽しく沖永良部語を習得する方法の1つとして「しまむにLINE スタンプ作成会」を考案し、実施した。本発表では、開催の経緯・実践内容・参加者に関する観察（作成時の交渉、作成会を通じて習得した沖永良部語のバリエティ、作成会後のLINE スタンプの使用状況など）、沖永良部語の保存・継承活動への効果、課題を報告する。

12:00～13:10 昼休み

13:10～13:50

研究発表「八重山語川平方言のアクセント体系に関する一報告」

セリック・ケナン（国立国語研究所）、荻野千砂子（福岡教育大学）、五十嵐陽介（国立国語研究所）

要旨

本発表では、八重山語川平方言のアクセント体系に関する調査結果を報告する。近年、八重山語諸方言のアクセント体系に関する見直しが進展しており、その結果、八重山語の殆どの方言が次の特徴を持つことが明らかになりつつある。(1) 三型アクセント体系を有すること、(2) 数える単位が韻律語と呼ばれる単位であること。

本発表では、川平方言を対象とした調査を通じて、当該方言もこの2点の特徴を備えていることを示す。その上で、八重山語諸方言のアクセント体系を対象としたセリック（2024）の分類に基づき、川平方言のアクセント体系の位置付けについて検討を行い、川平方言のアクセント体系が「小浜式」に該当することを示す。すなわち、川

平方言のアクセント体系は、ピッチ変動が指定される型が、韻律語の末尾音節が高くなる型として実現する体系である。

13:50～14:30

研究発表「南琉球伊良部島佐良浜方言のアクセント（初期報告）」

新田哲夫（金沢大学名誉教授）

要旨

佐良浜は宮古島の北西約5kmの伊良部島の東海岸に位置する集落で、池間添・前里添の隣接した二つの地区からなる。この集落は、宮古島北部の池間島から移住・分村して形成された集落で、新村として創設されたのは1720年のことといわれ、分派から300年以上が経過しているが、話されている言語は池間方言の一つと考えられている。一方、もう一つの有力な分村である宮古島北部の西原村の創設は1874年のことといわれ、移住から150年が経過しているが、現在の西原方言も池間方言の一つと考えられている。池間方言のアクセント研究については、西原方言の研究が進んでいる一方で（五十嵐他（2012, 2018）ほか）、佐良浜方言については報告がなかった。この発表では佐良浜方言のアクセントについて取り上げ、「韻律語」によって形成される三型アクセント体系、「上げ核」を有する弁別特徴について述べる。また西原方言との比較についても触れる。

14:30～14:40 休憩

14:40～15:20

研究発表「高知県土佐方言の動詞アクセントに関する予備的考察」

菅沼健太郎（金沢大学）

要旨

本発表では高知県土佐方言の動詞アクセントを対象とする。同方言の動詞のアクセントパターンは、語幹がもつ分節音の構造、および韻律情報、そして活用によって変化する。発表者は現在その多様なパターンを生み出すメカニズムを明らかにする研究を進めている。

本発表ではその一環として特に過去形（およびテ形とタラ形）に関する現時点での考察を述べる。同方言の過去形においては特に母音語幹動詞に特異な振る舞いがみられる（2拍高起無核動詞の長音化など）。本発表ではその特異な振る舞いは「母音語幹動詞は子音語幹動詞に下がり目の位置を合わせよ」とする制約が働いたことによって生じるという考えを述べる。

15:20～16:00

研究発表「阿蘇郡小国町の方言における異形態の出現パターンについて」

小川晋史（熊本県立大学）

要旨

熊本県阿蘇郡小国町の方言に見られる異形態の出現パターンについて分析した結果、母音および尾子音が2つのグループに分かれており、同じグループの音が連続することを避けるようにして異形態の音形が選択される傾向が強いことがわかった。本発表では主に助詞の異形態を取り上げて論じる。

秋田県能代山本方言の文法概略

——調査票を用いた文法調査の経過報告——

小原 雄次郎

大阪観光大学／国立国語研究所 共同研究員

要旨

秋田県能代山本方言の文法記述に向け、現在実施している調査票調査のうち、調査済みの項目（文タイプ、テンス・アスペクト、モダリティ、待遇、格標示）について経過報告を行う。文タイプとテンス・アスペクトでは方言固有の形態が出現するものの、体系的には共通語と同一である。モダリティ形式「ベ」は推量・確認要求・勧誘にのみ用いられ、意向には用いられない。待遇表現では、尊敬語の専用形式はないが、丁寧語では「ス」が用いられている。ただし本方言の「ス」は聞き手が目上であっても、話し手自身の行為に言及する際には用いられないため、丁寧語としての特徴を欠いている。主格標示と対格標示は基本的に無助詞になるが、対格が有生物の場合は助詞「ゴド」を用いることが多い*。

キーワード： 秋田方言、能代山本方言、調査票調査、文法、格標示

1. はじめに

1.1 目的と構成

能代山本方言の文法記述を進めるための基礎資料として 2022 年度から国立国語研究所の『文法調査票』（1.3 節で詳述）を用いて、現地での面接調査（エリシテーションによる調査）を行っている。本稿では 2022 年度と 2024 年度の調査で得られたデータをもとに、明らかになった文法事項について報告する。

以下、1 節では調査地点と調査方法について述べ、2 節では文タイプ、テンス・アスペクト、モダリティ、待遇について概説する。3 節では調査票に準拠しながら、主格標示と対格標示について詳しく見ていく。

1.2 調査地点と調査の概要

能代山本方言は、秋田県能代市と山本郡の八峰町、三種町、藤里町で話されている方言である。本方言の調査は 2022 年度と 2024 年度に実施した。主な調査協力者（話

* 本稿の内容は 2025 年 3 月 15 日に国立国語研究所で開催された令和 6 年度第 2 回「危機言語の保存と日琉諸語のプロゾディー」合同研究発表会で発表した内容に基づいているが、論旨を明確にするため必要に応じて新たな例文を調査票から追加した。また、主格標示と対格標示については、紙幅の都合から例文を大幅に削減した。

本稿は国立国語研究所共同研究プロジェクト「消滅危機言語の保存研究」（プロジェクトリーダー：山田真寛）、および JSPS 科研費基盤研究 A「消滅危機方言のプロゾディーに関する実証的・理論的研究と音声データベースの構築」（19H00530）の研究成果である。

者)は旧^{ことおか}琴丘町(現^{みたねちょう}三種町)の女性(1965年生)である。一部の調査については旧^{はちもり}八森町(現^{はっほう}八峰町)の女性(1958年生)と男性(1954年生)にもご協力いただいた。調査方法は調査票による共通語翻訳式の面接調査(エリシテーション)である。

能代山本方言を含む秋田県北方言では[i]と[e]が両者の中間的な母音で発音されることがある。この母音には地域差や世代によるバリエーションがあり、例えば「家」のことを旧八森町の2名の話者は[e]に近い音で発音するが、旧琴丘町の話者はやや[i]に近い音で発音する。このような中間的な母音は体系的に出現するわけではなく特定の語に限定されているようである(佐藤喜代治 1963)。調査データの大部分は旧琴丘町の話者から得られたものであるため、本稿でもこの話者の発音に従って表記している。また、鼻濁音については「nビ」(ビの鼻濁音を示す)のように「n」を付加して表記している。ただし、鼻濁音および濁音については不明瞭に発音されることも多く、必ずしも厳密に表記していない。

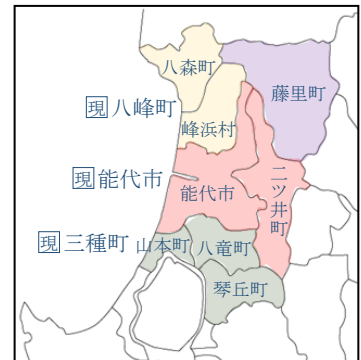


図1 能代市と山本郡

1.3 調査票について

今回の調査では、国立国語研究所(2017-20)の『文法調査票』と方言文法研究会(2022)の『基本例文 50』の2種類の調査票を用いた。国立国語研究所の『文法調査票』は共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」(プロジェクトリーダー:木部暢子)において作成された調査票であり、2017年度に「指示詞、文法数、代名詞、疑問詞」、2018年度に「形容詞、動詞活用、名詞述語」、2019年度に「格標示、主格標示、対格標示、情報構造」、2020年度に「文タイプ、テンス・アスペクト、モダリティ、ヴォイス、待遇」の調査が行われている。これらの調査で使われた調査文の総数は814文に上る。

方言文法研究会の『基本例文 50』は日本語の基本的な構文と文法形式(助詞・助動詞類)を含む50個の例文で構成されている。基本例文は文法を詳細に記述するためのものではなく、方言間の比較を企図したものである。2025年7月1日時点で全国16地点のデータが公開されている¹。

能代山本方言の調査では、『基本例文 50』の聞き取りが完了しており、『文法調査票』のうち「指示詞、格標示、主格標示、対格標示、情報構造、文タイプ、テンス・アスペクト、モダリティ、待遇」について、聞き取りが完了している。この調査データに基づき、2節では「文タイプ、テンス・アスペクト、モダリティ、待遇」の概略を示し、3節では「主格標示、対格標示」について詳しく説明する。

¹「方言文法研究会」(<https://sites.google.com/view/hogenbunpo/home>)のサイト内の「基本例文 50 要地方言訳データベース」で、調査票と調査済みの16地点のデータが公開されている。(2025年7月1日確認)

2. 能代山本方言の文法概略

以下、2 節と 3 節では能代山本方言の文法的な特徴について見ていく。この 2 節では「文タイプ、テンス・アスペクト、モダリティ、待遇」について概説する。

2.1 文タイプ

文タイプについては、Yes-No 疑問文と WH 疑問文での文末助詞の分布を確認する。次の (1) は Yes-No 疑問文の例である。Yes-No 疑問文の場合、共通語では助詞の「か」または「の」を付加して「飲むか？／飲むの？」のように述べたり、「か」と「の」の両者を付加して「飲むのか？」と表したりする。また「飲む？」のように無助詞で述べることも可能である。このような特徴は能代山本方言にも見られる。

- (1) オメノ トッチャ バンゲ サゲ (ッコ)² ノマッタ (ガ)。
君の お父さんは 毎晩 酒を 飲むの (か) ? (文タイプ [8])³

(1) の文末の「ノマッタ」の「ッタ」は、共通語の「の」に相当するため「飲むの」の意になる。また共通語の「飲むか」は「ノムガ」, 「飲むのか」は「ノマッタガ」となる。「ノム？」のように無助詞にもなり、Yes-No 疑問文は共通語と同様の体系を持つと言える。

次の (2) と (3) は WH 疑問文の例である。共通語の場合は「誰が～飲むの？」のように助詞「の」を伴うか, 「誰が～飲む？」のように無助詞になるのが一般的である。また, 「か」を伴って「誰が～飲むか？」や「誰が～飲むのか？」のように述べると, 修辞疑問文 (反語) として認識されやすい。同様の傾向は能代山本方言でも観察される。

- (2) イッショービン アッドモ ダー サゲ (ッコ) {ノマッタ／ノマズヤ}
一升瓶が あるけど, 誰が 酒を 飲むの? (文タイプ [21])
(3) ダー コンタ ンメグネー サゲ (ッコ) ノムベガ。【修辞疑問文】
誰が こんな まずい 酒を 飲むだろうか。 (文タイプ [35])

(2) は一般的な WH 疑問文で (3) は修辞疑問文である。一般的な WH 疑問文の場合, (2) のように「ッタ」や「ズ」が用いられる。どちらも共通語の「の」に相当する表現であるが, 「ズ」は感嘆の終助詞「ヤ」を伴うため, 口調や文脈によっては修辞疑問文にもなる。また, 無助詞で「(誰が) ノム？」と述べる事が可能であり, WH 疑問文も共通語と同じ体系を持つと言える。

² サゲッコの「ッコ」は指小辞であり, 格標示には関与していない。「サゲッコ」から指小辞「ッコ」を除いて「サゲ」といっても文法的な意味は変わらない。

³ 例文の右端に示した「文タイプ [8]」のような表記は『文タイプ調査票』の調査文 8 を意味している。これ以降の表記も同様である。

以上の結果は表1のようにまとめられる。能代山本方言では、共通語の助詞「の」の代わりに方言固有の「ッタ」と「ズ」が用いられているが、体系を見ると、Yes-No 疑問文も WH 疑問文も共通語と同様の体系であることが確認される。

表1 疑問文のタイプの違いと接続する助詞の関係

疑問文のタイプ	無助詞	～の	～か？	～のか？
Yes-No 疑問文	可能	ッタ	ガ	ッタガ
WH 疑問文	可能	ッタ/ズ	—	—

2.3 テンス・アスペクト

テンスについても共通語と同じ体系が確認できる。次の(4)と(5)は能代山本方言における動詞文の非過去と過去の例である。

- (4) イマカラ トモダジサ テガミ カグ。
 今から 友達に 手紙を 書く。 (基本例文 50 [1])
- (5) イサ カエッテ スグ テガミ カイダ。
 家に 帰って すぐに 手紙を 書いた。 (基本例文 50 [3])

非過去と過去では、それぞれ「カグ（書く）」「カイダ（書いた）」のように共通語と対応した活用が見られる。形容詞文も同様であり、「オッカネ（怖い）」「オッカネガッタ（怖かった）」のように対応している。

- (6) オイノ トッチャ オッカネ。
 俺の おやは 怖い。 (文タイプ [2])
- (7) オイノ トッチャ ムガス オッカネガッタ。
 俺の おやは 昔は 怖かった。 (文タイプ [3])

形容動詞文と名詞文も共通語と対応しているのが確認できる。ただし、能代山本方言では、過去が「～だった」ではなく、(9)と(11)のように「～デアッタ」となる。

- (8) オイノ トッチャ アイカワラズ {マメダ/マメデラ}。
 俺の おやは 相変わらず 元気だ。 (文タイプ [4])
- (9) オイノ トッチャ ムガス マメデアッタドモ。
 俺の おやは 昔は 元気だったけど、 (下略) (文タイプ [5])
- (10) オイノ トッチャ イシャダ。
 俺の おやは 医者だ。 (文タイプ [6])

(11) オイノ トッチャ イシャデアッタ。

俺の おやじは 医者だった。

(文タイプ [7])

以上の結果は表2のようにまとめられる。能代山本方言のテンス体系は共通語と同様であるが、形容動詞文と名詞文では過去が「～デアッタ」となる。

表2 文の種類ごとの非過去と過去

文の種類	非過去	過去
動詞文 (書く / 書いた)	カグ	カイダ
形容詞文 (怖い / 怖かった)	オッカネ	オッカネガッタ
形容動詞文 (元気だ / 元気だった)	(マメ) ダ	(マメ) デアッタ
名詞文 (医者だ / 医者だった)	(イシャ) ダ	(イシャ) デアッタ

次に、動詞（動態動詞）のテンス・アスペクト体系を確認する。表3は秋田方言のテンス・アスペクト体系を示している（日高水穂 2000:109, 表記を一部変更）。能代山本方言は表3の県北部の方言に含まれる。

表3 秋田方言のテンス・アスペクト体系（日高水穂（2000: 109）の表記を一部変更）

県内の地域	継続相非過去 (している)	完成相過去 (した)	継続相過去 (していた)
県北部 (能代山本方言を含む)	シテラ	シタ	シテアッタ
中央部	シテダ	シタ シテアッタ	シテアッタ シテエデアッタ
県南部	シテダ / シテラ	シタ シタッタ	シテダッタ / シテラッタ

表3を見ると、能代山本方言は「シテラ、シタ、シテアッタ」のように、単純なテンス・アスペクト体系をしている。これは共通語の「している、した、していた」に対応している。

今回の調査でも表3と同様の体系が確認できた。「している」（継続相非過去）は(12)のように「シテラ」（ツクッテラ）となり、「していた」（継続相過去）は(13)のように「シテアッタ」（ハコンデアッタ）となっている。また、「した」（完成相過去）は(5)で示したように「シタ」（カイダ）となる。

- (12) カッチャ カレー ツクッテラ。
お母さんが カレーを 作っている。 (テンス・アスペクト [5])
- (13) タロー ツグエ ハコンデアッタトギ ナガラ ナントシテダ。
太郎が 机を 運んでいた時, みんな どうしてたの? (主格標示 [22])

このように能代山本方言のテンス・アスペクト体系は共通語と同様に単純な体系を持つが、秋田県の中央部と県南部（表3中の網掛け）の方言では、完成相過去（「した」）に2種類の形態が見られ、中央部では「シタ」と「シテアッタ」、県南部では「シタ」と「シタッタ」が確認される。これらの地域の方言では、形態が分化しているだけでなく、機能も分化しており、両地域の「シタ」が一般的な過去を示すのに対し、「シテアッタ」（中央部）と「シタッタ」（県南部）は「話者が自分自身の判断（体験）を踏まえて述べる」過去を示すとされる（日高水穂 2000: 110）。

上述のように能代山本方言では完成相過去（「した」）は「シタ」のみで、中央部と県南部の方言に見られる「シテアッタ」や「シタッタ」のタイプの特殊な過去は見られない。ただし、次の(14)のように「シタッタ」という形態自体は本方言でも頻繁に用いられる。

- (14) コノ メ スィケン {アッタッタイバ／アッタズヤ}。
この 間 試験が あったんだよ。 (モダリティ [37])

能代山本方言に見られる「シタッタ」は、県南部の「シタッタ」のように「経験に基づく過去」を示すわけではなく、共通語の「のだ」に対応している。このように同じ形態であるが、地域によって別の機能を担っている。

2.4 モダリティ

モダリティについては、「べ」の用法を確認しておきたい。「べ」には「推量」「確認要求」「意向」「勧誘」の4つの用法が認められるが、秋田県下では「意向」の用法があまり見られないとされる（日高水穂 2000: 114）。今回の調査でも同様の結果が確認された。

- (15) イマ クルベ。 【推量】
もうすぐ 来るだろう。 (モダリティ [1])
- (16) アラ, ドーキューセサ カドサンテ イタベ。 【確認要求】
ほら, 同級生に 加藤さんて いたでしょ? (モダリティ [29])
- (17) シ クルド オモッテルヨ。 【意向】
うん, 来ようと 思っているよ。 (基本例文 50 [41])
- (18) (前略) ワラシガダ ツレデ ドッカ イグベ。 【勧誘】
(前略) 子どもたちを 連れて どこかへ 行こう。 (基本例文 50 [39])

(15)は「推量」，(16)は「確認要求」，(17)は「意向」，(18)は「勧誘」の用法を示している。日高（2000）が指摘するように(17)の「意向」では「べ」が用いられず，動詞終止形「クル」が用いられている。

また(16)の「確認要求」に関連して，次の(19)のように「同意要求」を行う場合も「べ」が用いられている。

- (19) イツバンニ ナルッテ オエ スゲベ。 【同意要求】
 一番に なるなんて， 私 すごくない？ （モダリティ [25]）

2.5 待遇

待遇表現について見ると，一般に東北方言では尊敬語や謙譲語のような「話題人物に対する敬語」に専用の形式が見られない。一方で，丁寧語のような「聞き手に対する敬語」では専用の形式が広く確認される。ただし，能代山本方言などの秋田県沿岸部の方言では，丁寧語もあまり使用されないとされる（日高水穂 2000: 117）。以下では，能代山本方言における待遇表現の使用状況について確認する。

まず「話題人物に対する敬語」（尊敬語）が使用されない点について確認する。次の(20)と(21)は尊敬語の使用を調査したものである。「（ある人物）は新聞を読んだ」と述べる際の「ある人物」が，目上の人物（市長）と目上でない人物（同僚）の場合で，どのように異なるかを確認した。

- (20) （市長Y） スンブン ミダ。
 （市長Y）は 新聞を 読んだ。（共通語：お読みになった） （待遇 [11]）
 (21) （同僚X） スンブン ミダ。
 （同僚X）は 新聞を 読んだ。（待遇 [15]）

本方言では，(20)のように「ある人物」が目上の場合も，(21)のようにそうでない場合も，尊敬語が用いられない。共通語に見られるような「お読みになった」や「読まれた」のような尊敬語は本方言に現れない。

一方で，共通語の「です」のように「聞き手に対する敬語」（丁寧語）については，東北方言で「ス」という形式が広く確認される。次の(22)と(23)は丁寧語について調査したものである。聞き手が「目上」の場合に「ス」が現れている。

- (22) キョーノ スンブン ミダスカ。 【聞き手が目上】
 今日の 新聞は 読みましたか。（共通語：お読みになりましたか） （待遇 [1]）
 (23) キョーノ スンブン ミダ（ガ）。 【聞き手が目上以外】
 今日の 新聞は 読んだか。（待遇 [6]）

(24) キョー サnビスナ。 【聞き手が目上】
今日は 寒いですね。 (待遇 [22])

(25) キョー サnビナ。 【聞き手が目上以外】
今日は 寒いね。 (待遇 [26])

(26) オイッケ イマガラ スンブン ミル。 【聞き手が目上】
私は 今から 新聞を 読む。 (共通語：読みます) (待遇 [19])

(27) オイッケ イマガラ スンブン ミル。 【聞き手が目上以外】
私は 今から 新聞を 読む。 (待遇 [23])

以上の結果をまとめると表4のようになる。能代山本方言は尊敬語の専用形式を持たないだけでなく、丁寧語の使用も限定的である。秋田方言で広く用いられる丁寧語「ス」は、本方言では目上の行為に言及する場合にしか用いることができず、話し手自身の行為に言及する場合は、聞き手が目上であっても「ス」を用いることがない。そのため、もはや丁寧語として機能していないと言える。

	尊敬語 (話題人物が目上)	丁寧語 (聞き手が目上)	
		話し手の行為	聞き手の行為
共通語	使用する	使用する	使用する
能代山本方言	使用しない	使用しない	使用する

3.能代山本方言における主格と対格の標示

先の2節では能代山本方言における文タイプ、テンス・アスペクト、モダリティ、待遇の特徴について概説した。この3節では主語と目的語の格標示について詳しく見ていきたいと思う。

3.1 主格標示

秋田方言の主格標示について、日高水穂（2000: 89-90）は「主題化されていない〈主体〉は、無助詞である場合が圧倒的に多い」と述べている。今回の調査でも日高（2000）が示すように主格が無助詞で現れる傾向が確かめられた。以下では、文の種類、主語有生性、動作主性、焦点・前提、従属節主語の観点から、本方言の主格標示について見ていく。

まず「文の種類」の観点から、動詞文、形容詞文、名詞文のいずれにおいても、主格が無助詞になることを確認する。次の(28)は他動詞文、(29)は自動詞文の例である。共通語ではいずれの場合も主格がガ格で標示されるが、能代山本方言では無助詞になる。また、形容詞文と名詞文においても、主格が無助詞になることが確認された（例は割愛する）。

(28) ヘヤン ナカ ミタッケー、ヘンヘΦ ツクエ ハコンデダ。 (主格標示 [1])
部屋の 中を 見たら、 先生が 机を 運んでいた。 【他動詞文】

(29) ヘヤン ナカ ミタッケー、ヘンヘΦ ネデアッタ。 (主格標示 [2])
部屋の 中を 見たら、 先生が 寝ていた。 【自動詞文】

次に「主語有生性」の点から主格標示について確認する。有生性は(30)のように階層化され、人間名詞は有生性が高く、動物名詞や無生物名詞は有生性が低くなる。人間名詞はさらに、一人称代名詞・二人称代名詞・固有名詞・一般名詞の順に有生性の高さが変わる。

(30) 人間名詞 (一人称 > 二人称 > 固有名詞 > 一般名詞) > 動物名詞 > 無生物名詞

この有生性の階層に基づき、「俺、お前、あいつ、太郎、お父さん、弟、友達、犬、看板」について調査を行った。ここでは(31)人間名詞（一人称代名詞）、(32)動物、(33)無生物の例を以下に示す。本方言では、有生性が高低にかかわらず、主格が常は無助詞で現れている。

(31) オイΦ タオレダラ、セワシテケレヤ。 (主格標示 [6])
俺が 倒れたら、 世話してくれよ。 【一人称代名詞】

(32) イノ ワンコΦ タオレダラ アンズマスグネガラ、 (主格標示 [13])
うちの 犬が 倒れたら 大変だから、(下略) 【動物名詞】

(33) ソゴノ カンバンΦ タオレダラ タイヘンダガラ、 (主格標示 [14])
その 看板が 倒れたら 大変だから、(下略) 【無生物名詞】

「動作主性」の観点から見ても、能代山本方言の主格は必ず無助詞で現れる。次の(34)と(35)はヲ格を伴う他動詞構文である。(34)は主格が他動詞「壊す」の動作主(Agent)となっている典型的な他動詞構文であるのに対して、(35)は主格が無意志動詞「流れる」の主体となっている非動作主的な他動詞構文である。本方言では、動作主性の違いによらず、主格が無助詞で現れている。

- (34) タローΦ オモチャ(ツコ) ブッカスタ。 (主格標示[15])
 太郎が おもちゃを 壊した。 【動作主的】
- (35) カワ(ツコ)Φ スマノ マンナガ ナガレテラ。 (主格標示[16])
 川が 島の 真ん中を 流れている。 【非動作主的】

次の(36)と(37)は自動詞構文である。(36)は主格が自動詞「泳ぐ」の動作主的な役割を担っているが、(37)は主格が自動詞「濡れる」の非動作主的(被動作主的)な主体となっている。自動詞構文についてもやはり主格は無助詞で現れている。

- (36) タローΦ イゲ(ツコ)デ オヨンデラ。 (主格標示[17])
 太郎が 池で 泳いでいる。 【動作主的】
- (37) アメ(ツコ) フツテキテ、 タローΦ ヨゴイダ。 (主格標示[18])
 雨が 降り出して、 太郎が 濡れた。 【被動作主的】

「焦点」と「前提」の点から調査したのが、(38)～(41)の例文である。(38)は文焦点の例であり、文全体が焦点化の範囲となっているため、特定の項には焦点が当たっていない。(39)のWH焦点では疑問詞「誰が」に焦点が当たっており、(40)の対比焦点では「AではなくB」のBに焦点が当たっている。(41)では主格が「前提」の中に現れており、焦点が当たらない例である。

- (38) ヘヤン ナカ ミダッケ タローΦ ツグエ ハゴンデダ。 (主格標示[19])
 部屋の 中を 見たら 太郎が 机を 運んでいた。 【文焦点】
- (39) イグ キゲネガッタドモ ダーΦ ツグエ ハゴンデアッタッタ。 (主格標示[20])
 よく 聞こえなかったけど 誰が 机を 運んでいたの。 【WH焦点】
- (40) オイデネシテ タローΦ ツグエ ハゴンデアッタッタデ。 (主格標示[21])
 俺じゃなくて 太郎が 机を 運んでいたんだよ。 【対比焦点】
- (41) タローΦ ツグエ ハゴンデアッタトギ ナガラ ナント シテダ。 (主格標示[22])
 太郎が 机を 運んでいた時 みんな どう してたの。 【前提】

能代山本方言では、主格にどのような焦点が当たっていても、主格は無助詞で現れる。また、主格に焦点が当たっていない場合も同様に主格は無助詞で現れる。

「従属節主語」について調査したのが、次の(42)～(44)である。(42)は連体節、(43)は条件副詞節、(44)テ形節になっているが、いずれの従属節においても主格が無助詞で現れている。共通語では連体節のガ格をノ格にできる場合があり、(42)のような連体節でも「太郎が倒れた(場所)」のガ格を「太郎の倒れた(場所)」と、ノ格にすることができる。秋田方言でも同様にガ格をノ格に変換することが可能であるが、ガ格がノ格になった場合は無助詞にならないようである(日高水穂 2000: 90)。

- (42) タローΦ タオレダ {ドゴノズ} ココ。 (主格標示 [31])
 太郎が 倒れた場所は ここ。 【連体節】
- (43) タローΦ タオレダラ ダー セワサッタベガ。 (主格標示 [31])
 太郎が 倒れたら 誰が 世話するんだらう。 【条件副詞節】
- (44) タローΦ タオレデ ズロー タスケニ キダドモ ンナ ブnズダッタ。 (主格標示 [33])
 太郎が 倒れて 次郎が 助けに 来たが みな 無事だった。 【テ形節】

以上、3.1 節では能代山本方言の主格がどのように標示されるかをさまざまな条件のもとで調査した。その結果、どのような条件下でも主格が無助詞で現れるということが確認された。

3.2 対格標示

共通語では動作や知覚の対象をヲ格またはガ格で標示する。しかし、秋田方言ではこれらも一般に無助詞で現れる。ただし、動作や知覚の対象が有生物の場合、助詞の「トコ (またはドゴ)」を用いることもある(日高水穂 2000: 90-92)。

秋田方言のこのような特徴は、本方言にも見出される。以下では、他動性、特定性と修飾要素、焦点・前提、隣接性、有生性の5つ観点から、対格が一般に無助詞で現れることを見ていく。

まず「他動性」の観点から対格標示について確認する。調査では「～を壊す、～をたたく、～を組み立てる、～を飲む、～を洗う、～を待つ、～を知っている、～を忘れる、～を聞いた、～が聞こえる、～が要る、～がほしい、～ができる」のように、他動性の異なる13の動詞について調べた。以下に、他動性の高い「壊す」と、他動性の低い「できる」の例を挙げる。

- (45) タロー ツグエΦ ブッカシタ。 (対格標示 [1])
 太郎が 机を 壊した。 【直接影響(変化)】
- (46) タローダッケ エーゴΦ デキラッタ。 (対格標示 [7])
 太郎は 英語が できる。 【能力】

共通語では(45)の「壊す」でヲ格、(46)の「できる」でガ格が現れるが、能代山本方言ではどちらも無助詞で現れる。また、上述の13の動詞全てで対格が無助詞で現れた。

次に「特定性」と「修飾要素」の観点から対格標示について確認する。(47)～(49)は対格が不特定の場合(例では不特定の皿)である。(47)は対格が不特定で修飾要素がつかない場合、(48)は対格が不特定で修飾要素が句の場合、(49)は対格が不特定で修飾要素が節の場合である。以下のように、修飾要素の有無にかかわらず、対格は無助詞で現れている。

- (47) タローダバ イグ サラ(ツコ)Φ ワラッタ。(対格標示 [15])
 太郎は よく 皿を 割る。
- (48) タローダバ イグ ソノ イノ サラ(ツコ)Φ ワラッタ。(対格標示 [16])
 太郎は よく その 家の 皿を 割る。
- (49) タローダバ イグ ソノ イサ アッタ サラ(ツコ)Φ ワッタモンダ。(対格標示 [17])
 太郎は よく その 家に あった 皿を 割っていたものだ。

次の(50)～(52)は対格が特定の場合(例では「うちの皿」)である。今回も修飾要素の有無とタイプの違いから3つのパターンを調査した。その結果、修飾要素の如何にかかわらず、対格が無助詞で現れることが確認された。

- (50) イサ サラ(ツコ) アッタベ。
 うちに 皿が あったでしょ。
 タローダッケ アレΦ ワッタッタデ。(対格標示 [18])
 太郎は あれを わったんだよ。
- (51) タロー イノ サラ(ツコ)Φ ワッタッタ。(対格標示 [19])
 太郎は うちの 皿を 割った。
- (52) タロー イサ アル サラ(ツコ)Φ ワッタッタ。(対格標示 [20])
 太郎は うちに ある 皿を 割った。

このように能代山本方言では対格が不特定でも特定でも、常に無助詞で現れる。また、修飾要素の有無や種類も、対格標示に影響を与えないことが確認された。

次の(53)～(56)は「焦点」と格標示の関係を調査したものである。(53)は文焦点の例であり、特定の項には焦点が当たっていない。(54)はWH焦点、(55)はWH応答焦点、(56)は対比焦点であり、それぞれ対格に焦点が当たっている。

- (53) デッケ オト シタドモ ド シタ{ズ／ッタ}。
 大きな 音が したけど どう したの?
 タロー サラ(ツコ)Φ ワッタッタ。(対格標示 [59])
 太郎が 皿を 割ったんだよ。【文焦点】

- (54) タロー ナニΦ ワッタ{ズ／ッタ}。 (対格標示 [57])
 太郎は 何を 割ったの? 【WH焦点】
- (55) タロー サラ(ツコ)Φ ワッタッタ。 (対格標示 [58])
 太郎は 皿を 割ったんだよ。 【WH応答焦点】
- (56) タロー ユノミ ワッタッタ。
 太郎は 湯呑を 割ったの?
 ナモ タロー サラ(ツコ)Φ ワッタッタ。 (対格標示 [56])
 いや 太郎は 皿を 割ったんだよ。 【対比焦点】

対格にどのような種類の焦点が当たっても、対格は常に無助詞で現れており、焦点化が対格標示に影響を及ぼさないことが確認できる。

「隣接性」について調査したのが(57)～(59)である。隣接性は、対格と動詞が隣接しているか離れているかを示すものである。(57)では動詞と対格が隣接しているが、(58)では両者の間に副詞句が挿入されており、(59)では副詞句に加え主格も挿入されている。

- (57) オメ(ダバ) コンタ ジョ n ブダ ツグエΦ ブッカシタ{ズ(ガ)／ッタ}。
 お前は こんな 丈夫な 机を 壊したの? (対格標示 [62])
- (58) オメ(ダバ) ツグエΦ ナントシテ ブッカシタ{ズ(ヤ)／ッタ}。
 お前は 机を どうやって 壊したんだ? (対格標示 [63])
- (59) コンタ ジョ n ブダ ツグエΦ オメ ナントシテ ブッカシタ{ズ(ヤ)／ッタ}。
 こんな 丈夫な 机を お前は どうやって 壊したんだ? (対格標示 [64])

能代山本方言では、対格と動詞が隣接していても離れていても、対格は必ず無助詞で現れている。

最後に「有生性」について見ていく。先述のように、秋田方言では動作や知覚の対象が有生物の場合、助詞の「トコ（またはドゴ）」（以降は「ドゴ」と称する）を用いることがある（日高水穂 2000: 90-92）。この特徴は能代山本方言でも観察される。

- (60) タロー オイドゴ ミデラ。
 太郎が 俺を 見ている。 (対格標示 [21])

この「ドゴ」は、対格が有生物である場合に付加されるが、有生物であれば常に現れるというのではなく、有生性の高い名詞に付加される傾向がある。(61) [= (30) 再掲] の有生性の階層に当てはめると、「ドゴ」は階層の上位（左側）の名詞とともに現れやすい。

- (61) 人間名詞（一人称 > 二人称 > 固有名詞 > 一般名詞）> 動物名詞 > 無生物名詞
 俺 お前 花子 友達 犬 外

ただし、有生性の高さは決定的な制約ではない。一人称代名詞や二人称代名詞のように有生性の高いものであっても、「ドゴ」が付加されない場合があり、逆に「犬」や「木」のように有生性が相対的に低いものであっても「ドゴ」が付加されることがある。有生性の階層はあくまでも傾向性を示すものであり、「ドゴ」の付加には有生性とは別の機能的（用法的）な制約があると考えられる。この制約について、現時点で明確なことは言えないが、いくつか示唆的な事象を紹介したい。

(62) タロー ワンコΦ ミデラ。 (対格標示 [25])
太郎が 犬を 見ている。

(63) A: タロー イマ ナニ シデラ。
太郎は 今 何を しているの。
B: ワンコドゴ ミデラ。
犬を 見ている。

最後に、相対的有生性についても見ておきたい⁵。(61)に示したように有生性は階層を成しており、一人称代名詞が最も有生性が高く、動物などは相対的に有生性が低くなっている。そのた

⁵ 有生性の階層および相対的有生性に関する定義と研究の流れについては小川雅貴（2019）を参照。

め、「俺」と「犬」を比べると、「俺」は「犬」よりも相対的に有生性が高いということになる。一方、「太郎」と「花子」はともに人間固有名詞であるため、有生性の点で等位になる。このような有生性の相対的な高さを、主格と対格の間で比較したのが、相対的有生性であり、次の(64)のように「等位、順行、逆行」の3パターンがある。

- (64) a. 太郎が **花子**を 見ている。 (太郎 = 花子) 「等位」
 b. 太郎が **犬**を 見ている。 (太郎 > 犬) 「順行」
 c. 犬が **太郎**を 見ている。 (太郎 < 犬) 「逆行」

(64a) では主格と対格がともに人間固有名詞であるため、「等位」の関係になる。(64b) では主格が人間固有名詞で対格が動物名詞である。このように主格の有生性が相対的に高い場合は「順行」と呼ぶ。一方、(64c) では主格が動物名詞で対格が人間固有名詞になっている。このように主格の有生性が相対的に低い場合は「逆行」と呼ぶ。

このような相対的有生性の観点から調査を行った結果、有生性の高い人称代名詞では、順行でも逆行でも「ドゴ」が付いており、「ドゴ」と相対的有生性には関連がないと考えられる。

- (65) タロー **ハナコ**ドゴ ミデラ。 (対格標示 [23])
 太郎は 花子を 見ている。 【等位】
 (66) オイ **オメ**ドゴ ミデラ。 (対格標示 [27])
 俺は お前を 見ている。 【順行】
 (67) オイ **オメ**ドゴ ミデラドモ ド シタ。 (対格標示 [46])
 お前は **俺**を 見ているけど どう したの? 【逆行】

同様の結果が(68)と(69)でも確認できる。有生性が相対的に低い「犬」では、順行であっても「ドゴ」は現れにくい、有生性の高い「太郎」では、逆行であっても「ドゴ」が用いられる。

- (68) タロー **ワンコ**Φ ミデラ。 (対格標示 [25])
 太郎が **犬**を 見ている。 【順行】
 (69) ワンコ **タロー**ドゴ ズット ミデラ。 (対格標示 [52])
 犬が **太郎**を じっと 見ている。 【逆行】

以上のことから、「ドゴ」の使用に相対的有生性は関与していないと考えられる。

3.2 節では、他動性、特定性と修飾要素、焦点・前提、隣接性、有生性の観点から能代山本方言における対格標示について調査した。その結果、本方言では主格の場合と同様に、対格も基本的に無助詞で現れる。ただし、対格の有生性が高い場合は「ドゴ」が付加されやすい。

4.まとめと今後の課題

本稿では調査票調査（エリシテーション）によって得られた資料に基づき、能代山本方言の文法的な特徴について報告した。今回の内容は日高水穂（2000）が指摘したものと概ね同じであるが、本稿では調査データを多く提示することでより具体的に記述できたと思う。

秋田方言で主格と対格が基本的に無助詞になるという傾向も、従来から指摘されてきたことであるが、本稿ではさまざまな可能性を調査した上で確定的な結論を述べることができた。この点において本稿には重要な意義があると思う。

今回使用した『文法調査票』と『基本例文 50』は、どちらも複数の方言の文法を比較することを企図して作成されたものである。そのため、さまざまな方言に対応できる柔軟さがある一方、個別方言の記述を行うにはやや目が粗いとも言える。今回の報告でも、モダリティ表現の「べ」や丁寧語の「ス」、対格標示の「ドゴ」に関して、これらの調査票だけでは十分に記述できないことが明らかになった。今後は能代山本方言の特徴に合わせて、適宜、調査項目を追加して対応していきたいと思う。

参考文献

秋田県教育委員会編（2000）『秋田のことば』無明舎出版.

小川雅貴（2019）「局所的有生性による日本語の能動態・受動態選択：東京方言・東北方言・近畿方言の比較」『第 158 回日本言語学会予稿集』107-113.

佐藤喜代治（1963）「秋田県米代川流域の言語調査報告」『日本文化研究所研究報告別巻』1（井上史雄・他（編）『日本列島方言叢書 4 東北方言考 3 秋田県・山形県』ゆまに書房 再録）.

日高水穂（2000）「秋田方言の文法」秋田県教育委員会編『秋田のことば』74-132. 無明舎出版.

沖永良部島「しまむに LINE スタンプ作成会」の実践と成果報告

高 智子^a

岩崎典子^b

^a 日本国際協力センター／国立国語研究所 共同研究員

^b 南山大学／国立国語研究所 共同研究員

要旨

2024 年、親子で沖永良部の言語（以下、しまむにとする）について対話をしたり、交流しながら、楽しくしまむにを習得する方法の 1 つとして「しまむに LINE スタンプ作成会」（以下、作成会とする）を考案し、実施した。本稿では開催の経緯・実践内容・参加者に関する観察（作成時の交渉、作成会後の LINE スタンプ使用状況など）・沖永良部語の保存・継承活動への効果や課題を報告する。*

キーワード：言語復興、危機言語、沖永良部島、LINE スタンプ、デジタルコミュニケーションツール

1. はじめに

本稿は沖永良部島において、しまむにの継承保存を目的として行った「しまむに LINE スタンプ作成会」に関する実践、効果、課題をまとめたものである。

Moseley (2010) において Kunigami (国頭語) に分類されているしまむには UNESCO の「危機言語地図」(Moseley 2010) に掲載されており、消滅の危機にある言語のひとつに数えられている。そのような中、沖永良部島では、山田真寛氏 (国立国語研究所)、横山晶子氏 (国立国語研究所) を中心に、研究者と地域住民が協力し合い、様々な方法でしまむにの言語記録、継承活動、そして言語復興活動が行われてきた。沖永良部島知名町田皆字で、しまむにや伝統芸能の記録と継承を行ってきた字民有志のボランティア団体「たんにゃむに・サークル」の代表、田邊ツル子氏によると、「しまむにの保存や普及活動に関わる人は大凡同じメンバーで、限られている。そのため今まで関わったことがない若者層や子どもたちを巻き込んでいき、更には日常的にしまむにに触れるような機会を作ることが重要だ」ということだった。この意見を受け、田邊氏と筆頭執筆者である高は、これまでしまむにの保存／普及活動に関わりがなかった住民や子どもを巻き込み、一過性のイベントで終わらない活動として「しまむに LINE スタンプ作成会」の開催を考案した。

* 本稿は国立国語研究所の共同研究プロジェクト「消滅危機言語の保存研究」(プロジェクトリーダー：山田真寛) 科研 24H00092 (代表：山田真寛) の研究成果である。しまむに LINE 作成会の考案に携わり、作成会にもご尽力いただいている田邊ツル子様、本論文作成にあたりデータ翻訳にご協力いただいた沖良子様、本論文のためにしまむに LINE スタンプ作品をご提供くださった皆様に深く御礼申し上げます。

LINE は月間国内ユーザー約 9500 万人¹を抱えるコミュニケーションアプリであり、その利用者は性別・年齢・職業・居住地域において大変バランスがよい。そのため LINE や LINE スタンプは多くの人にとって馴染みがあるコミュニケーションツールであると考えられた。このことにより、この作成会の企画には 3 つの可能性があると考えられた。1 つ目は、しまむにを LINE スタンプにすることで、作成会後もしまむにが身近で実用的なツールとして活用される可能性である。2 つ目は、一般的に LINE スタンプは LINE のチャット機能で相手とコミュニケーションを取る際に使われるため、常に「相手」「場面」「目的」を意識しながらしまむにが使用される可能性である。3 つ目は、これまでしまむにの保存、継承活動には参加したことはなかったが、「LINE スタンプ作成」そのものに興味がある人の参加が促される可能性だ。そういった参加者がいた場合、しまむに LINE スタンプ作成会は結果的にしまむにに触れる機会と成り得る。

このような可能性を感じながら、2024 年、沖永良部島にて「しまむに LINE スタンプ作成会」を 3 回開催することになった。

2. 背景

本節では、先行研究に基づき、まず LINE アプリなどインターネットを利用して容易に情報を発信したり相互のやりとりをしたりすることのできるいわゆるデジタルコミュニケーションツールが、消滅の危機にある先住民言語や少数話者言語の再活性化に果たす役割について論じる。しまむに LINE スタンプは、しまむにと画像によって構成されている。作成会では参加者同士が対話を行いながら、LINE スタンプに使用するしまむにと画像を選択している姿が見受けられた。本節は、参加者同士が任意に対話を行いながら、LINE のやり取りにふさわしいしまむにと画像を選択することの意義についてもまとめる。

2.1 消滅の危機言語の活性化とデジタル・コミュニケーション

デジタル・テクノロジーによる先住民言語の使用は単にその言語の使用を増すだけではなく、特に若い世代の学習者が先住民言語にアクセスしやすくなる (Huicán Herrera 2022: 7)。さらに、Galla (2018) や Soria (2016) が、デジタルメディアにおける言語使用がその言語が現代のメディアで機能する実用性のある言語であることを示し、言語の威信性、コミュニティのプライドも高めると述べている。よって、その言語と関わるコミュニティ・メンバーのアイデンティティをサポートすることにもつながる。

LINE アプリのための LINE スタンプは、一般的にはエモティコンに相当する。Onwuegbuzia (2016) は、ナイジェリアにおいてデジタルメディアでは英語が主要で、ヨルバ語やイボ語などの先住民言語が使用されていないという状況を打破するための解決方法として、チャットのプラットフォームで使用するための先住民族の文化を反映する画像と先住語テキストを含むエモティ

¹ 2023 年 6 月時点。LINE キャンパスホームページより。

コンの作成と使用を提唱している。先住民言語の使用を時代遅れと捉える人びとにとってエモティコンがデジタルメディアにおける先住民言語との接触の契機となるとしている。

また、遠隔地にある言語が移住や過疎化も言語が消滅の危機に晒される一因であることは想像に難くないため、Crystal (2001) が示唆するように遠隔地の人びとがデジタル・ツールを用いてコミュニケーションできることを活かし、デジタルメディアにおいて消滅危機言語の使用を促すことができれば、言語使用の活性化を図ることも期待できる。

しまむに LINE スタンプ作成会では、自らが撮影した写真または自ら描いた画像をしまむにテキストとともに挿入すること、しまむにの共通語訳をつけたバイリンガルのテキスト使用が提案された。写真は、テキストに相応しい沖永良部島の光景、動植物、モノが選ばれることが多い。島の自然や島における生活への想いが反映されると考えられる。スタンプが活用されれば、しまむに学習中のコミュニティーメンバーがしまむにに接する機会を増し、デジタル・コミュニケーションにおけるしまむにの存在感や有用性を高めることのみならず、未習者への働きかけにもなることが期待される。

2.2 対話など相互行為のもとらす学習効果（社会文化論の知見）

2024 年 3 月に実施された第 1 回 LINE スタンプ作成会において筆者らは、参加者が LINE スタンプで表現したいしまむにについて活発なやりとりを行なっているのを観察し、8 月実施の作成会では、作成会という機会が、協働的学習の場を提供することにも着目した。

近年、第二言語（幼少期に習得した言語のあとで学習・習得する言語）の授業でペアまたはグループの活動が取り入れられることが多いが、学生同士の協働対話およびチューターと学習者の対話による第二言語習得については 1990 年代ごろから Vygotsky（例えば、Vygotsky 1978）の発達心理学の理論に基づいて議論されるようになった。この理論的枠組みは、周囲との関わり、環境や文化的産物（道具、記号等）、慣習などを学習の媒介として重視することから Sociocultural Theory（社会文化論）と呼ばれている。その媒介の一つが、言語であり、ペアやグループワークにおいて学習項目に関して対話することで第二言語の習得が促される（例えば、Swain 2000 を参照されたい）。したがって、LINE スタンプ作成会の場合も、言語（共通語）を媒介として第二言語としてのしまむにの習得を促進すると考えられる。媒介としての言語の使用で殊に注目されるのが「内言」（private speech）と呼ばれる言語使用であり、自身とのコミュニケーションとして、自身の認知や行動を調整していると考えられている（鈴木 2016 : 83）。Ohta (2001) は、米国の大学の日本語授業内の教師と学生、学生同士の対話を調査する中で内言に注目し、ある学生が教師のフィードバックで自身の発話を修正して言い直した際、指名されていない別の学生が小さな声でそれを繰り返している場面を捉えた。その学生は同じ授業内で、その形式（形容動詞の否定形）を正確に産出した。この事例および他の事例も踏まえて、Ohta (2001: 59-61) は、学生が目標形式を繰り返す内言によって環境から得た形式を自身の認知資源へと内化していると述べている。

また、対話参加者が学習項目についての知識が不均衡な場合、学習項目により熟達している側も相手への説明のために言語化することによりさらなる習得につながるため、協働対話で学習の成果が上がるのは、双方であることが報告されている（王 2014, Masuda and Iwasaki 2018）。

Swain（2000: 112-113）は、第二言語学習場面の対話をエビデンスとして提示した上で、協働対話は、参加者が言語の意味についてのコミュニケーションをしている中で自ずと問題解決および知識構築につながる対話となると論じている。（本実践の対話の具体例を 4.3.3 で示している。）

3. LINE スタンプ作成会の実践概要

3.1 実施日時・場所・参加人数

LINE スタンプ作成会は 1. で前述した田邊ツル子氏の協力を得て、2024 年度に 3 回実施した。

1 回目は 2024 年 3 月 9 日に田皆字公民館で行い、田皆字を中心とした有志住民の大人 7 名が参加した。この回は同年 8 月に開催予定だった「子どもの参加」を目的とした作成会のための、いわば練習回として開催し、しまむに LINE スタンプ作成が可能かどうかを実験的に観察する回となったが、結果的に参加者全員が問題なくしまむに LINE スタンプを作成することができた。

この 1 回目を土台とし、2 回目は 2024 年 8 月 24 日に田皆小学校で開催した。参加者²は大人 8 名、子ども³10 名、合計 18 名だった。親子での参加は 6 組、祖母・孫関係での参加が 1 組あった。3 回目は 2024 年 8 月 25 日に和泊中央公民館で実施し、参加者は大人 12 名、子ども 5 名、合計 17 名だった。親子での参加が 1 組、祖母・孫関係の参加が 1 組あった。また、この 2 回目、3 回目には南山大学の学生 3 名が運営ボランティアとして参加し、参加者のしまむにスタンプ作成をサポートした。この 3 名は来島前に教員から沖永良部島について少し学び、事前にある程度しまむにを学習していたが、運営ボランティアとして関わる過程で、実際にしまむにを学習したり、使用を試みたり、作成会参加者である沖永良部住民と交流をした。

² 表 1 「※その他」に示した講師や運営サポート者は「参加者」人数には含んでいない。

³ 第 2 回、3 回のしまむに LINE 作成会では未就学児・小学生・中学生・高校生の参加があったため、本稿で「子ども」と記載する場合、高校生以下を示すものとする。

表1 しまむに LINE スタンプ作成会の実施日時・場所・参加人数と内訳

回	日時	場所	参加人数	大人	子ども ※高校生以下	親子	祖母と孫	※その他
1	2024年 3月9日(土) 9:00-11:30	田皆字公民館	7名	7名	なし	なし	なし	講師(高)
2	2024年 8月24日(土) 9:00-12:00	田皆小学校	18名	8名	10名	6組	1組	講師(高) ・サポート(田邊氏・岩崎・大学生3名)
3	2024年 8月25日(日) 9:00-10:30	和泊中央公民館	17名	12名	5名	1組	1組	講師(高) ・サポート(田邊氏・岩崎・大学生3名)



図1 第2回目の集合写真(左)と第3回目作成会のようす(右)

3.2 実践方法

ここではしまむに LINE スタンプ作成会の方法を説明する。

まず参加者には事前の準備として LINE スタンプ作成のための専用アプリケーション⁴をインストールしてもらった。当日は、スタンプに使用するしまむにと、そのしまむにに適した写真を決め、スタンプ作成を行った。適した写真がなかった場合、自分でイラストを描いたり、会場の外に出て写真撮影をする参加者がいた。LINE スタンプは、当日中にはリリースされないため⁵、作成会後は、スタンプがリリースされた場合の対応に関して LINE チャットなどを使ってフォローをした。

上記がしまむに LINE スタンプを作成するための方法であるが、作成会当日はしまむにに対する学びを意識してもらうため、第2回、第3回では、ワークシートを準備し、作成会前には「現時点で知っているしまむに」を、作成会後には「(作成会を通じて)新たに学んだしまむに」を個々に書き出してもらい、作成会を通じてどのようなしまむにを習得したのか、自己の学びを視

⁴ アプリケーションの名前は「LINE スタンプメーカー」。

⁵ LINE スタンプは作成後、LINE ヤフー株式会社の審査を受け、適切であると判断された場合に正式に使用できるようになる。審査には日数を要する。

覚化してもらった。また、筆者らは、第2回、第3回では作成会中の参加者同士のやりとりを録音した。第1回で参加者が各自スタンプを作成しながら、スタンプに含めるメッセージをしまむにではどのように表現するかについて活発なやりとりをしているようすを観察していたため、そのやりとりを分析するためである。

3.3 参加者の作成したしまむに LINE スタンプ

3.3.1 しまむに LINE スタンプに使用されたしまむにのバラエティ

3回に渡る作成会で使用されたしまむには78種類であった。それをカテゴリーに分け、分類すると下表のようになる。

表2 しまむに LINE スタンプに使用されたしまむにのバラエティと例

カテゴリー	実際に参加者がしまむにLINEスタンプに使用したしまむにの例 ※()内は日本語訳
コメント	でいかちゃん(よかった)、みじらしゃ(おもしろい)、ゆかあやぶたんやー(よかったですね)
感謝	みへでいろどー(ありがとうございます)、あやぶらんどー(どういたしまして)
感情	あべー(しまった)、ほうらしゃー(うれしい)、ぬんきやー(怖い)、はせえ(はー(溜息))
あいづち	がんがん(そうそう)、がんでいろがん(そうですね)
励まし・励まされる	ちばりよー・きばりよー(がんばってね)、ちばゆんどー(がんばります)
あいさつ	をうがみやぶらー(あいさつ全般)、うだぬ しゃーぶら(よろしくお願いします)、にぶゆんどお(ねるよ(おやすみなさい))
会話の終了	またやー(またね)、またなーちゃや(また明日ね)、どうくさーし たばりよー(お元気でいてください)
天気や気候	あつあんどー(暑い)、ひーさ(寒い)、しださあやぶんやー(涼しいですね)
食べること	おいし たばりよー(おありがとうございます)、おいしい(まーさん)
会いたい	おいぶしゃ あやぶんどー(自分が会いたいです)、おいぶしゃ あやぶんやー(互いに会いたいです)
質問	いちゃなとぅいよー?(どうなっているの?)、ぬがー(どうして?)
待ち合わせ	なまから いきやぶんどー(今からいきますね)、まちゆんどー(待っています)
お願い	たぬまー(頼みます)、どうかどうか(どうかどうかお願いします)
了解	わかいやぶたん(わかりました)、わかたん(わかったよ)
その他	しーむりぶ(島みかん)、ふりむん(馬鹿者)、よかにーせ(好青年)

日本語の LINE スタンプの使用事例を、送り手の意図や感情の明確性という観点から分類した須田ら(2016)は、LINE スタンプを A 送り手の意図や情報を明確に伝達しているもの、B 情報の伝達はしているが曖昧性が高いもの、C 情報伝達以外の目的で使用されているものという3種類に分類した。須田ら(2016)は A の特徴として「約束を決める・応援、感謝などを表現する、喜びや感謝、了解などのはっきりした表現に使用される、感情はつかめるが、その度合いは文脈に依存している」と述べており、表2の結果からしまむに LINE スタンプ作成会の参加者たちが作成したしまむに LINE スタンプは須田ら(2016)の A の傾向を持つものが多いように見える。

表2の例からは、なぜこのしまむにを選んだのか、どのような文脈や場面で使用する予定なのかという疑問が生まれる。なぜなら、今回のしまむにの選び方の中に、沖永良部島でのしまむに使用の特徴が隠れていると考えられたからだ。

3.3.2 しまむに LINE スタンプのスタイルのバリエティ

しまむに LINE スタンプは「しまむに」素材とそれに付随する写真・イラストなどの「図案」素材で構成されるが、出来上がったしまむに LINE スタンプのスタイルを分類すると、スタンプの文字に関しては「しまむにだけを使用したもの」、「しまむにと日本語を使用したバイリンガルスタンプ」に分類できた。またスタンプの図案に関しては「写真を使用したもの」と「自作のイラストを使用したもの」に分類でき、「写真を使用したもの」に関しては「島に関係あるものや島の風景の写真」、「家族や家族にまつわるもの、ペットの写真」に分類できた。「島に関係あるものや島の風景の写真」は魚、海、植物、生き物、日の出や夕日、サトウキビ畑などが多かった。参加者が作成した具体的な作品例は図2～5である。



図2 「しまむにのみ」と「島に関係あるものや島の風景の写真」の例



図3 「しまむにと日本語」と「島に関係あるものや島の風景の写真」の例

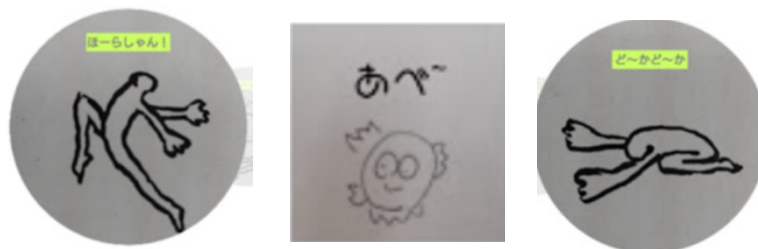


図4 「しまむにのみ」と「イラスト」の例



図5 「しまむにと日本語」と「家族や家族にまつわるもの、ペットの写真」

4. 参加者に関する観察

本項では、作成会中のデータや作成会後に行った事後アンケート調査結果を通して行った参加者に関する観察結果について報告する。

4.1 作成会におけるしまむにの習得数による参加者の観察

3.2 で述べた通り、第2回、第3回では、ワークシートを準備し、作成会前には「現時点で知っているしまむに」を、作成会後には「（作成会を通じて）新たに学んだしまむに」を個々に書き出してもらい、作成会を通じてどのようなしまむにを習得したのか、自己の学びを視覚化してもらった。第2回、第3回の参加者合計35名中、このワークに回答した参加者は22名で、回答率は62.8%だった。未回答の主な理由としては、作成会中にワークをする時間を十分に与えられなかったことにある。特に第3回作成会は90分間という短時間での作成会であったため、このワークに十分に時間をさくことができなかった。

このワークでは、作成会前に「現時点で知っているしまむに」の回答合計数は302個であった。そして「（作成会を通じて）新たに学んだしまむに」の回答合計数は81個だった。これは作成会を通じて、新しいしまむにを1人あたり3.68個学んだことになる。この結果から、作成会はしまむにを学ぶ機会に成り得ると考えられ、作成会を通して学んだしまむにを、作成会後にLINEスタンプという方法を通じて使用し、習得していくことの重要性がより考えられた。

4.2 作成会後アンケート結果による参加者の観察

事後アンケート調査は、2025年2月に実施したもので、しまむにLINEスタンプ作成会での出来事や、作成会後のしまむにLINEスタンプの使用状況などを知る目的で行った。アンケート調査は第1回から第3回までの参加者のうち高校生以上に対して行い⁶、合計17の回答があった。回収率は70.8%だった。

4.2.1 基本情報

回答総数17（70代1、60代2、50代8、40代5、10代1）は、沖永良部島出身であり沖永良部島在住の方が10、沖永良部島出身ではないが現在沖永良部島在住の方が7だった。日常における

⁶ アンケートはGoogleフォームを使用して行ったため、自分のスマートフォンを持っている高校生以上が回答することとなった。

しまむにの使用状況については、よく話せる 1, 話せるほうだ 3, 簡単なフレーズや単語なら話せる 3, 聞いておおよそ理解できるが、話すことはあまりできない 4, 簡単なフレーズや単語なら聞いて分かるが、話すことはあまりできない 2, 聞くことも話すこともあまりできない 4 だった。

4.2.2 しまむに LINE スタンプ作成会への参加動機

まず、参加者たちが作成会に参加しようと思ったきっかけを知るために「作成会前、どうしてしまむに LINE スタンプ作成会に参加しようと思いましたか（複数回答可）」という質問を行った。この結果、「LINE スタンプ作りに興味があったから」16, 「しまむにに興味があったから」12, 「家族・友人に誘われたり、勧められたから」9, 「親子で参加できるイベントだったから」4, 「その他」2 という回答数だった。この結果から、しまむにに興味があるかどうかに関わらず、「LINE スタンプ作成」そのものが作成会への大きなモチベーションになり得ることが分かった。

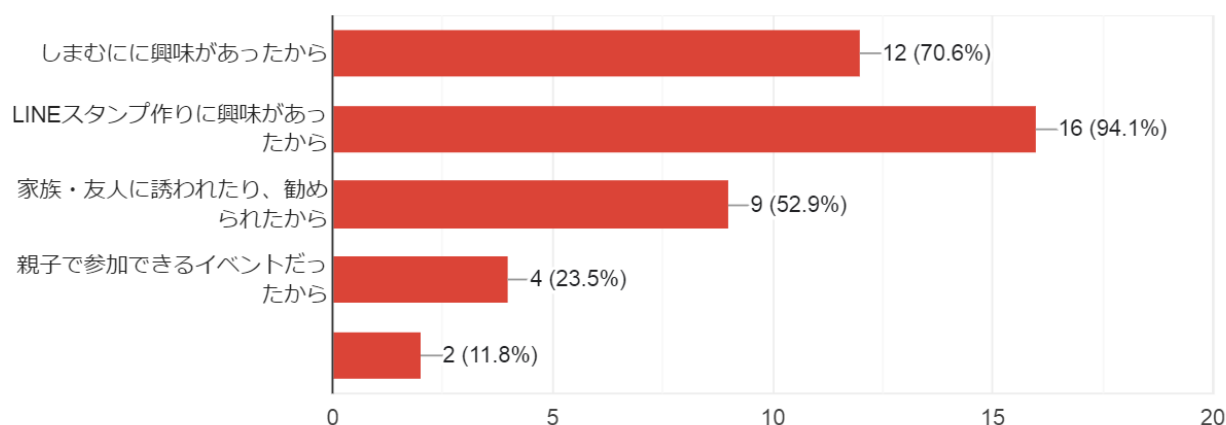


図6 「作成会前、どうしてしまむに LINE スタンプ作成会に参加しようと思いましたか（複数回答可）」に対する回答結果

4.3 しまむに LINE スタンプ作成会中について

4.3.1 作成会中の対話相手

次に、作成会中に参加者たちが誰と話をしていたかを知るため、「しまむに LINE スタンプを作成するときは誰と話すことが多かったですか（複数回答可）」という質問を行った。「講師・サポート役の大学生」と「友人や参加者同士」が同数で各 11, 「しまむにが分かるスタッフ・参加者」10, 「一緒に参加した家族」5, 「特に誰とも話さなかった」は 0 だった。

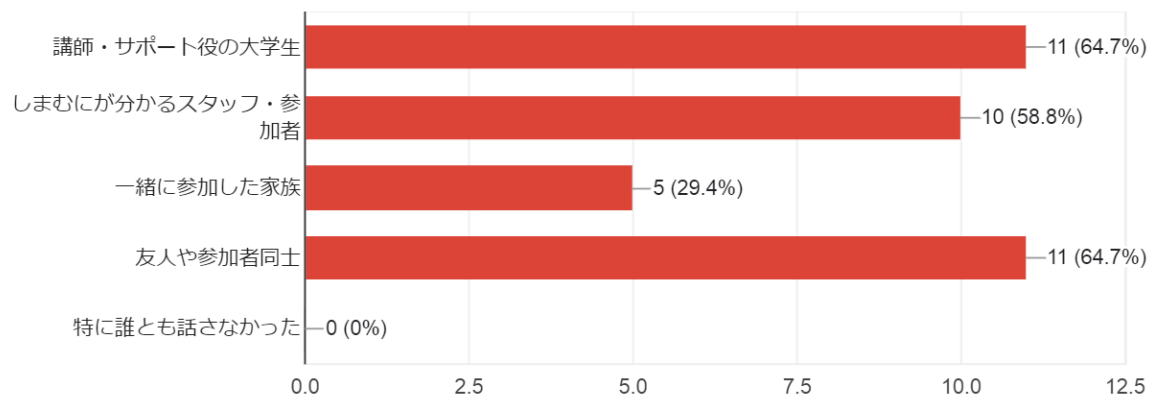


図7 「しまむに LINE スタンプを作成するときは、誰と話すことが多かったですか（複数回答可）」に対する回答結果

4.3.2 しまむにが分からなかったときの対応

続いて「作成会中、自分が表現したいことのしまむにが分からないとき、どうしましたか（複数回答可）」という質問を行った。結果は「会場にいるしまむにを話せる人に聞いた」が14と最も回答数が多かった。しかし、次に回答数が多かったものは「分からないしまむには使わず、分かるしまむにだけを使った」5であり、自分が使ってみたいしまむによりも、使えるしまむにだけを使ってスタンプ作成をしていた方がいたことが分かった。他の回答は「講師・サポート大学生に聞いた」4、「しまむにが分からない参加者同士で相談し、しまむにが話せる親族が言っていたことなどを思い出しながら考えた」3だった。確かに会場では、自分の親はしまむにでどのように言っていたかなどの情報を参加者同士で共有する場面が見受けられた。また「その他」の回答が1つあったが、「私はしまむに話者であるため、（自分自身がしまむにがわからないという状況はなく、他の人に）しまむにを聞かれたら（答えた）」とのことだった。なお「会場にいないしまむにが分かる人に LINE や電話などで聞いた」「インターネットで調べた」「その場では質問したり解決したりせず、あとでしまむにが分かる人に聞いた」に対する回答数はそれぞれ0であった。

4.3.3 作成会中の対話例

3.2で前述した通り、第2回、第3回の作成会では、参加者らの会話を録音した。以下は第2回作成会の録音からの抜粋である。複数のテーブルで多数の話者が同時に活動して発話しており、2台のICレコーダーと3台のスマホで録音していたが、聞き取りにくい箇所が多く、…は省略した箇所（聞き取れる範囲で概略を説明）を示している。抜粋した対話は父親と子ども3人の座るテーブルのICレコーダーで録音されたものである。しまむに話者のA氏、しまむに初心者ではあるもののスタンプ作成経験のある大学生運営ボランティアが3名巡回していた。

対話例

1 子ども：おやすみの方言がわからない

…〈父親が「きばりよ、きばりよー」や感嘆詞「あべ」など発言し、子どもが「あべ」を繰り返したりしていた。他の話者の「めんなさい」「お願い」などが断片的に聞こえる〉

2 子ども：おやすみって方言なんていう（前の発話から1分44秒）

…〈子どもの質問に答えてスタッフ・父親・子どもの「あべ」についてのやりとりのほか他者の対話など〉

3 父親：（A氏に）ちょっとおやすみってわかります？おやすみ（子どもの質問の4分後）

4 A氏：にぶり、にぶり、にぶりにぶりよ、にぶり、自分が寝ようと思ったら、にぶらやー、にぶういんど、にぶりよ、にぶりって、子どもたちに言うときには、にぶりよー、ねなさい、にぶり

5 子ども：にぶり？

6 A氏：もう寝なさいだったら、なーにぶり

7 子ども：ふーん。にぶり？

8 A氏：もう寝なさいだったら、なーが入って、なーにぶり、もう、なー

9 子ども：なーにぶりよ、なーにぶりよー、なーにぶりよー

この会話の「子ども」は3人姉妹で声が類似しており、どの発話がどの子どもであったかは判断できない。3人は11歳、13歳、14歳で、子どもたち自身がLINEスタンプを使用することができるかどうかは確認していなかったが、LINEスタンプという具体的なしまむにの使用場面を念頭に、しまむに表現を知ろうとするきっかけになっていたことが観察できた。また、父親も子どもの疑問についてA氏に尋ね、A氏と子どもが「おやすみ」についてやりとりしている。9行目では、子どもが「なーにぶりよー」という表現を繰り返して、記憶しようとしているようである。社会文化理論で重視される内言の事例と言える。また4.1で述べた、作成会後に参加者に「（作成会を通じて）新たに学んだしまむに」を書き出していただくワークで、この父親は「にぶり（おやすみ）相手へ」「にぶいんどー（おやすみ）自分が」を書いていた。

4.4 作成会後のしまむに LINE スタンプの使用状況について

4.4.1 作成会後のしまむに LINE スタンプの使用状況

次に作成会後、参加者たちがしまむに LINE スタンプをどの程度活用しているかを知るために「作成会後、しまむに LINE スタンプをそのくらい使用していますか」という質問を行った。全体の41%が「週に数回」，「月に数回」「ほとんど使用していない」が同数で23.5%，ほぼ毎日が12%，「全く使用していない」が0%だった。この結果から、約53%の参加者が、ほぼ毎日もしくは週に数回、しまむに LINE スタンプを使用していることが分かった。

4.4.2 使用頻度が高いしまむに LINE スタンプ

作成会で作成したしまむに LINE スタンプのうち、どのスタンプをよく使用しているのかを知るために「よく使用するしまむに LINE スタンプを使用頻度が高い順に3つ書いてください」と

いう質問を行った。回答結果は「みへでいー（ありがとうございます）」が11と最も使用頻度が高く、続いて「がんがん（そうそう）」5、「あべー（しまった）」「をうがみやぶらー（あいさつ全般）」が各々4、「ちばりよー（がんばってね）」「またやー」「みへでいー（ありがとう）」が各々3、「あやぶらんどー（どういたしまして）」「うだぬ しゃーぶら（よろしくお願いします）」「きばりよー⁷（がんばってね）」「でいかちゃん（よかった）」「でいかちゃん（よかったよかった）」「ほうらしゃー（うれしいです）」が各々2という結果だった。

4.4.3 しまむに LINE スタンプを送る相手

続いて、参加者たちが作成したしまむに LINE スタンプを誰に対して使用しているのかを知るために「しまむに LINE スタンプを主に誰に送っていますか（複数回答可）」という質問を行った。回答の結果は「しまむにが分かる友人」の回答数が最も多く 14、「しまむにが分かる家族」が 10、「しまむにが分からない友人」と「しまむにが分かる同僚」が同数で 8、「しまむに関連の知り合い」5、「しまむにが分からない同僚」0 だった。また、その他として「島外にいる同級生」という回答が 1 つあった。この結果から、しまむにが分かる人に対してしまむに LINE スタンプを使用する傾向が強いことが分かった。ただ、友人という親しい間柄であればしまむにが分からなくても使用していることも分かった。

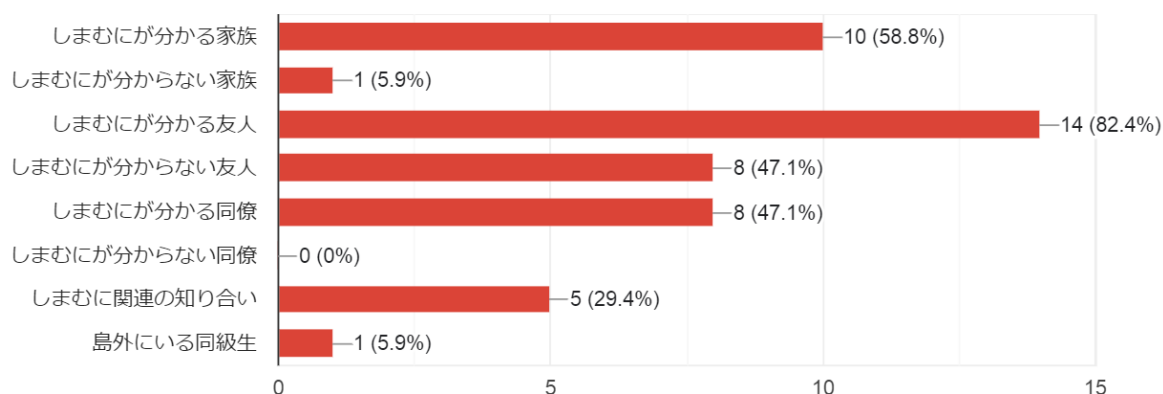


図8 「しまむに LINE スタンプを主に誰に送っていますか（複数回答可）」に対する回答結果

4.4.4 しまむに LINE スタンプを使用する理由

しまむに LINE スタンプを使用する理由を知るために「しまむに LINE スタンプを使用する理由を教えてください（複数回答可）」という質問を行った。「作成したスタンプを活用したいから」という回答が 15 あり、「自分自身で作成した」ことが大きなモチベーションとなっていることが分かった。他には「コミュニケーションが楽しくなるから」14、「できるだけしまむにを使

⁷ 4.4.2 には「がんばってね」という意味の「ちばりよー」「きばりよー」という 2 種類のしまむにが記述されているが、「きばりよー」は主に知名地域、「ちばりよー」は主に和泊地域でそれぞれ使用されている。

いたいから」11, 「しまむにを広めたいから」8, 「しまむにを話す仲間と使いたいから」6 だった。

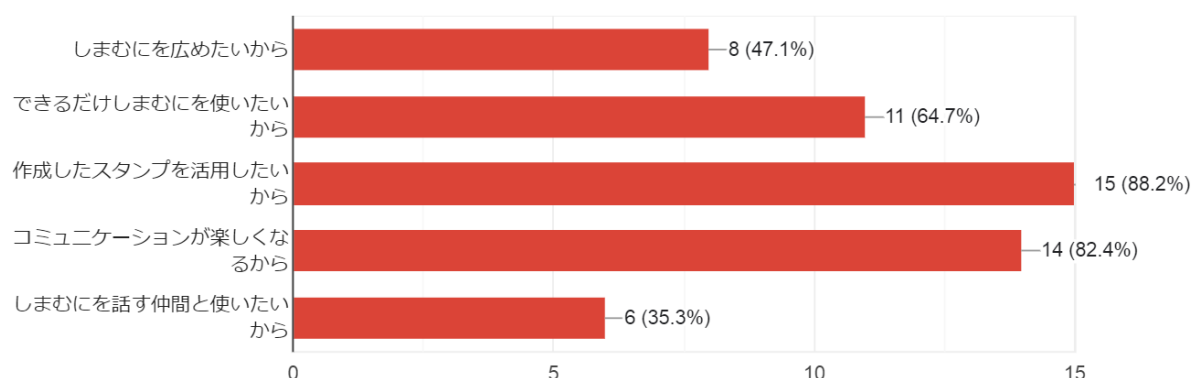


図9 「しまむに LINE スタンプを使用する理由を教えてください（複数回答可）」に対する回答結果

4.4.5 しまむに LINE スタンプを使用した相手の反応

続いて、しまむに LINE スタンプを受け取った相手の反応を知るため「しまむに LINE スタンプを使用したときの相手の反応はどうでしたか（複数回答可）」という質問をした。「喜んでくれたり、おもしろがったりしてくれた」15, 「しまむに LINE スタンプやしまむにを使って返事をしてくれた」7, 「しまむにの意味を聞かれた」5, 「特にリアクションはなかった」1 という結果だった。この結果から、参加者がしまむに LINE スタンプを送ることで、しまむにについての話題が始まったり、相手がしまむにを使用するきっかけを作る機会となっていることが分かった。

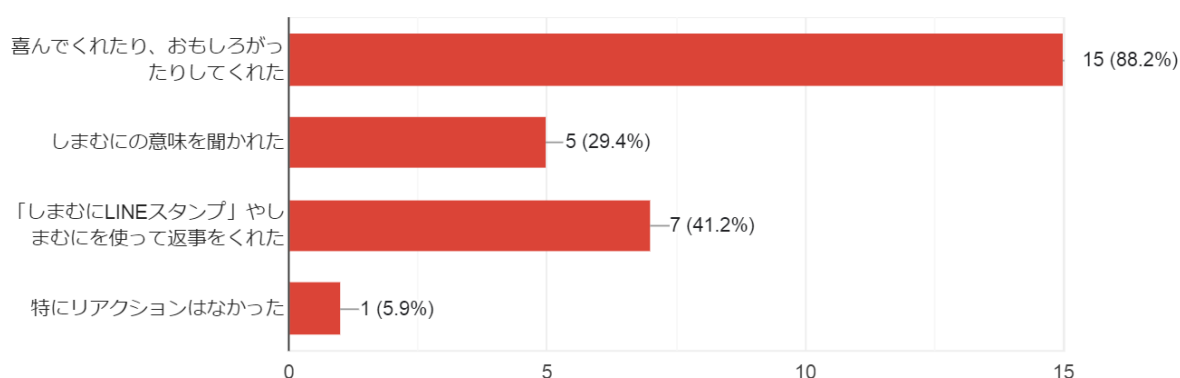


図10 「しまむに LINE スタンプを使用したときの相手の反応はどうでしたか（複数回答可）」に対する回答結果

4.4.6 しまむに LINE スタンプを使用しない理由

参加者の中には、作成会后しまむに LINE スタンプを使用していない参加者もあり、その理由を知るために「作成会后、しまむに LINE スタンプを使用していない場合、その理由を教えてください（複数回答可）」という質問を行った。回答は「他のスタンプをよく使う」3、「普段から LINE スタンプをあまり使わない」2、「しまむにを使う相手がいない」「スタンプで使用したしまむにやデザインが使いづらい」が同数の1だった。また、「その他」として「日常では、しまむにスタンプのことを思い出さない」という回答が1つあった。

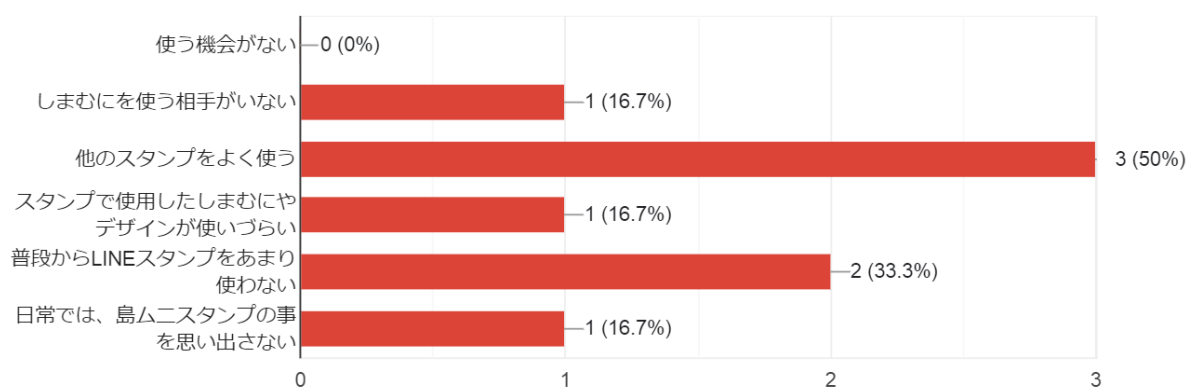


図 11 「作成会后、しまむに LINE スタンプを使用していない場合、その理由を教えてください（複数回答可）」に対する回答結果

4.4.7 新たなしまむに LINE スタンプの作成

作成会で、参加者たちは、しまむに LINE スタンプの作成方法を習得したと考えられたため、「作成会后、自分で新たにしまむに LINE スタンプを作成しましたか」という質問を行った。回答数 17 のうち、新たなしまむに LINE スタンプを作成したという回答数は 4、作成したセット数が 1 セットが 2、4 セット以上が 2 だった。「どうしてもっと作成しようと思いましたか」という質問に対しては、全員が「もっとしまむにの表現を増やしたかったから」「しまむに LINE スタンプを作るのが楽しかったから」「家族や友人としまむに LINE スタンプを使ってコミュニケーションしたかったから」への回答率が 100%、「しまむにを広めるために作りたかったから」への回答率が 75% だった。

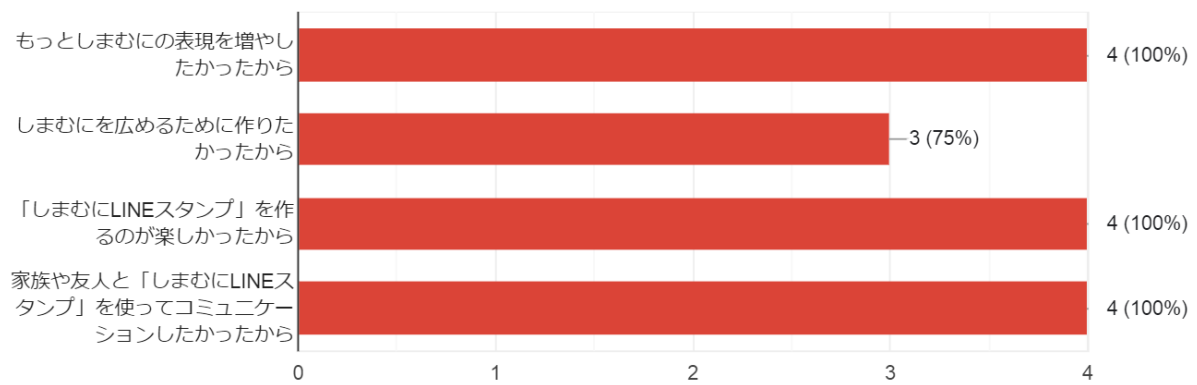


図 12 「どうして、もっとしまむに LINE スタンプを作成しようと思いましたか（複数回答可）」に対する回答結果⁸。

4.4.8 しまむに LINE スタンプとしまむに継承活動について

今回、しまむにを LINE スタンプにするという活動はしまむにの継承活動の一環として始まった。そこで、実際に参加した方々が作成会がしまむにの継承活動に役立つと実感できたかどうかを知るために「しまむに LINE スタンプの作成や使用は、しまむにの継承活動に役立つと思いますか」という質問を行った。回答率は「とても役に立つ」が 58.8%、「ある程度役に立つ」が 41.2%だった。その理由として「しまむにを使う機会が増えるから」「しまむにに興味を持つ人が増えると思うから」の回答数がそれぞれ 15、「若い世代にも受け入れられやすいから」12、「しまむにを楽しく学べるから」11 だった。

5. 考察

第 1 節から 4 節にかけては、沖永良部島で実施したしまむに LINE スタンプ作成会の実践を報告し、様々なデータをもとに参加者の観察を行った。本稿では作成会の効果と課題について検討していく。

まず、今回の作成会がしまむにの継承や普及に貢献したかについて考察する。4.1 で記述した通り、作成会を通して参加者は平均で 1 人 3.68 個の新しいしまむにを学習したことになり、作成会がしまむにの学習につながったと言える。2.2 では社会文化論に基づき、対話が第二言語の習得を促すことについて言及したが、これについて Swain (2000) は、目標言語を産出しようとすることで自身にとって何が未知なのかが分かることや目標言語について説明して言語化することが習得を促進するというアウトプット仮説で説明している。しまむに LINE スタンプ作成会から作成会後にかけて、参加者たちはこのアウトプット仮説に基づく言語習得を 2 度経験したのではないかと考えられる。1 度目は、作成会中の参加者同士の対話を通じた学びの過程である。しまむに LINE スタンプ作成会で、参加者たちは自分自身が LINE スタンプにしてみたいしまむにを考え、自分はどのようなしまむにが表現できて、どのしまむにが分からないのかが分かった。そして、

⁸ 回答者は作成会後に新たにしまむに LINE スタンプを作成した者のみ。

4.3.2 で述べた通り、分からないしまむにについては、「会場にいるしまむにを話せる人に聞いた」り、「しまむにが分からない参加者同士で相談し、しまむにが話せる親族が言っていたことなどを思い出しながら考えた」りした。いわば、Swain (2000) のアウトプット仮説で想定されるアウトプットを実行しながら、新たなしまむにのインプットが行われたと考えられる。2 度目は、作成会后、実際に自分自身が作成したしまむに LINE スタンプをコミュニケーションの方法の 1 つとして使用する過程である。4.4.1 で述べた通り、作成会の参加者のうち約 53% が作成会で作成したしまむに LINE スタンプをほぼ毎日もしくは週に数回使用している。つまり参加者たちは作成会においてインプットから学んだ新たなしまむにを、日常的に使用することによってアウトプットしているのだ。アウトプットの過程で、自分が表現したいこととできることのギャップに気づいたり、実際にしまむに LINE スタンプを送信することで自分が表現したいことが表現できたか検証したり、自分が表現したいしまむにの特性や意味について振り返る機会を得る。この過程によって、更にしまむにの習得が促進されると考えられる。こういったことを考慮すれば、しまむに LINE スタンプを他の参加者と一緒に作成し、使用するという一連の仕組みが、しまむに習得の促進に貢献していると考えられる。更には、4.4.5 で述べた通り、参加者たちがしまむに LINE スタンプを送信した相手も、そのしまむにの意味を聞いてきたり、手持ちのしまむに LINE スタンプやしまむにを使って返答をしたりしていることから、参加者たちのアクションが周囲へのしまむにやしまむに使用の普及の一端を担っていることが分かった。

作成会で参加者たちは新たなしまむにを学習したが、その学習内容については課題もある。沖永良部島には 42 の字や集落があり、しまむにも字や集落ごとに地域差がある（横山 2022）。今回の作成会の参加者たちは田皆字や和泊町を中心に沖永良部島の様々な地域から集まった。4.3.2 で述べた通り、参加者たちは自分が表現したいしまむにが分からなかった場合に、主に「会場にいるしまむにを話せる人に聞く」ことで解決をしたが、今回の作成会ではしまむにの地域性について参加者に意識づけする時間を取らなかったため、しまむにが殆ど分からない参加者の中には、しまむにの地域性を意識せず、どこの字・集落のしまむにを教えてもらったのかを知らないままに LINE スタンプに使用した方もいる可能性が否めない。また、アウトプットに関しても課題がある。それは作成会に参加した子どもの多くが同伴した大人（親や祖母）のスマートフォンを使用してしまむに LINE スタンプを作成していた点に関わる。この状況により、作成会当日は親子でしまむにについて対話する風景が見られ、子どもたちも楽しそうにしまむに LINE スタンプ作成をしていた。しかし、スマートフォンが大人のものであるため、作成会后にしまむに LINE スタンプを使用し、実際にアウトプットしているのは大部分が大人であるという結果になってしまった。第二言語の習得にはインプットに加え、アウトプットも大切であると前述したが、作成会后、子どもによるアウトプットの機会をいかに生み出すかが大きな課題である。

次にしまむにの継承活動や普及活動に LINE スタンプ作成という方法を取ったことについて考察する。3 回に渡る作成会の参加者は合計 42 名であったが、参加動機としては「LINE スタンプ作りに興味があったから」というものが最も多かった。また上述した通り、作成会の参加者のうち約半数が、作成会后もほぼ毎日または週に数回、しまむに LINE スタンプを使用しており、そ

の理由としても「作成したスタンプを活用したいから」が最も多かった。更に、参加者の中には作成会後もオリジナルのしまむに LINE スタンプ作成を続けている方が 4 名おり、その最も大きな理由のひとつにも「しまむに LINE スタンプを作るのが楽しかったから」というのがあった。以上のことから、参加者たちが作成会に参加したり、しまむに LINE スタンプを使用したり、新たにしまむに LINE スタンプを作成するモチベーションとして、LINE スタンプそのものの作成への興味やおもしろさ、自作の LINE スタンプ活用への意欲があると考えられ、しまむにの言語継承活動や普及活動に LINE スタンプの作成や使用を用いることの有用性を感じた。一方で、4.4.6 で述べた通り、作成会後にしまむに LINE スタンプを使用しなかった方もおり、その理由としては「他のスタンプをよく使う」からというのが最も多かった。1.で述べた通り、コミュニケーションツールとして LINE を使用している人は多く、作成会の参加者たちも普段から LINE スタンプに慣れ親しんでいるように思えるが、実際に作成したのは初めてである方ばかりだった。必ずしも便利な LINE スタンプを作成する必要はないと考えているが、この作成会自体がしまむにの継承活動の一環であることを考慮すれば、ある程度アウトプットの回数が増えるもの、つまり日常的によく使う LINE スタンプを作成してほしいと考えている。今後は「日常的によく使用する LINE スタンプはどのようなスタンプか」を各人が振り返るワークを作成会の中で導入したり、一般的な LINE スタンプのバリエーションや使われ方について分析し、その結果をしまむに LINE スタンプ作成会に反映する必要があると考えられる。

しまむに LINE スタンプ作成会は、しまむにの継承活動の一環として開催してきたが、4.4.8 で述べた通り、参加者の 58.8%が「役に立つ」と回答した。上述した課題もあるが、デジタルコミュニケーションツールを使用したしまむにの継承活動の新たな方法としては、今後も継続してしまむに LINE スタンプ作成会を開催する予定である。

参考文献

- Crystal, David (2001) *Language and internet*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Galla, Candace Kaleimamoowahinekapu (2018) Digital realities of indigenous language revitalization: A look at Hawaiian language technology in the modern world, *Language and Literacy*, 20(3): 100–120.
- Huilcán Herrera, Marcela I. (2022) The use of digital technologies in language revitalisation projects: Exploring identities. *Journal of Global Indigeneity*, 6(1): 1–17.
- Masuda, Kyoko & Iwasaki, Noriko (2018) Pair-work dynamics: Stronger learners' languaging engagement and learning outcomes for the Japanese polysemous particles *ni/de*. *Language and Sociocultural Theory*, 5(1): 46–71.
- Moseley, Christopher (ed.) (2010) *Atlas of the World's Languages in Danger*, 3rd edition. Paris: UNESCO Publishing.
- Ohta, Amy Snyder (2001) *Second language acquisition processes in the classroom: Learning Japanese*. Mahwah, NJ: Lawrence Earlbaum Associates.

- Onwuegbuzia, Emeka Felix (2016) Indigenising emoticons for language revitalisation. In: Ndimele Ozo-mekuri (ed.) *ICT, Globalisation and the study of languages and linguistics in Africa*, 251–311. Port Harcourt, Nigeria: M&J Grand Orbit.
- 王文賢 (2014) 「習熟度が異なる協働対話における支援のあり方—協働対話における社会的側面と認知的側面の分析を通して」『第二言語としての日本語の習得研究』17: 5–22.
- Soria, Claudia (2016) What is digital language diversity and why should we care? In Joseph Cru (ed.), *Linguapax Review 2016—Digital Media and Language Revitalisation*. Linguapax International. <https://www.linguapax.org/en/linguapax-review-en/>
- 須田康之, 大関達也, 菊池康介, 高山美畝, 山我拓也, 施姍, 丁冉月 (2016) 「LINE スタンプを用いたコミュニケーションの特質」『兵庫教育大学研究紀要』第 49 巻 : 1–8
- 鈴木渉 (2016) 「社会文化的アプローチに基づく第二言語習得研究—最新の研究動向と教育的示唆」『第二言語としての日本語の習得研究』19: 82–97.
- Swain, Merrill (2000) The output hypothesis and beyond: Mediating acquisition through collaborative dialogue, 97–114. In James P. Lantolf (ed.) *Sociocultural theory and second language learning*. Oxford: Oxford University Press.
- Vygotsky, Lev Semenovich (1978) *Mind in society: The development of higher psychological processes*. Michael Cole, Vera Johnson, Sylvia Scribner, and Ellen Souberman (eds, trans). Cambridge, USA: Harvard University Press.
- 横山晶子 (2022) 『0 から学べる島むに読本』東京 : ひつじ書房

関連 Web サイト

- LINE ヤフー株式会社『LINE キャンパス』 <https://campus.line.biz/line-ads/courses/user/lessons/oada-1-2-2> (2025 年 4 月 6 日確認)
- LINE CREATORS MARKET ホームページ <https://creator.line.me/ja/stickermaker/> (2025 年 5 月 8 日確認)

本書は以下の共同研究プロジェクトで発行されています。

国立国語研究所機関拠点型基幹研究 「開かれた言語資源による日本語の実証的・応用的研究」

- 基幹型プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」サブプロジェクト「日本・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」（サブプロジェクトリーダー：五十嵐陽介）
- 基幹型プロジェクト「消滅危機言語の保存研究」（プロジェクトリーダー：山田真寛）

日琉諸語の記述・保存研究Ⅳ

2025 年 7 月 28 日発行

編者 大島 一、セリック・ケナン、五十嵐陽介、山田真寛

発行 国立国語研究所 研究系

〒190-8561 東京都立川市緑町 10-2

TEL. 0570-08-8595（ナビダイヤル）FAX 042-540-4333
